



きつ組が大切にしていること

気持ちに寄り添いともに成長する



「ねえ、ねえ、わにくん。俺、今日散歩に行きたい。」「じゃ、他の友達も誘って行こうか。」ただ、みんなが散歩に行きたい訳ではありません。野球盤をしたい子、ボードゲームやカードゲームをしたい子、園庭で遊びたい子など様々です。結局この日は、数名の子どもたちが連れ立って散歩に行くことになりました。誘って来た子は、持って来た網を片手に、意気揚々と歩いています。そう、彼の目的は、せせらぎ公園の近くに流れている川で魚を捕まえることです。他の子も、その子の勢いに引つ張られるように歩いています。車の横を通るときは、すかさず、高校生の男の子が「車に、網が当たらんように気をつけんと。」とお兄さんらしく、優しく注意を促してくれます。数分後、川が見えてきました。気がつくと、網を持った子は一目散に、土手から草が茂っている斜面を下って行っています。他の子も、その子に続けと言わんばかりに戸惑いながら斜面を下って行きます。小さい子も上級生に手を引かれながらついてきます。生き物の気配を感じて網をさっと入れる子、その横で魚を探す子、それらの様子をじっと見つめる子、川をのぞきこみすぎて足

を滑らせそうになる子…みんなの気持ちが一瞬になつていきます。結局、この日は魚は捕まえることはできませんでしたが、みんな満足気な表情をしていました。その子どもたちの様子を見て、子どもの頃のことを思い出して、なんとなく心地よさを感じている自分がいます。きつ組は、小学生から高校生までの障がいのある子どもや学校に行けない子どもなど様々な子どもたちが通ってくる場所です。先ほどお伝えしたような関わりは、子どもたちの中で自然に生まれることもありませんが、最初からすべてそのよううまくいくわけではありません。子どもたちも同じです。そこで、スタッフは、子どもたち一人ひとりの様子をしっかり見つけ、話を聞き、気持ちを受けとめていきながら、子どもたちのことを知ることから始めます。そして、子どもたちが安心して心を開いてくれる関係づくりをしていきます。そのつながりを、他の子どもたちにも広げていくようにしていきます。子どもたち同士の関係性が築けたら、本人らしさを大切に、成長を一緒に応援していきます。そのために、私たちスタッフは専門性を高め、

「おはよ」
「おはよう、よく来たね」
「ただいま」
「おかえり。学校楽しかった？」
「こんなやりとりから、きつ組はスタートします。」



www.hullpong.jp

同時に、固定概念にとらわれず、様々な視点や姿勢で子どもたちと向き合うことを大切にしています。きつ組では子どもたちの自発性を大切にします。だから、本人がやることと決めたことや頑張りたいたいと思つたことなどを一緒に考え、達成できるように応援していきます。本人の気持ちに寄り添い、ともに成長していくということです。今はコロナの影響で大変な時期です。子どもたちも不安に感じながら過ごしています。そういう時だからこそ、本人の気持ちに寄り添う『子ども主義』を大切に、子どもたち、そしてご家族の方々とともに、前を向いて進んでいきたいと思つていきます。(きつ組所長・鰐川幹浩)

にわたって育まれる力だと考えています。同様な考え方に、私がまだ大学生だった頃「自閉を砕く(片倉信夫・映子著 学研1985)」という本を通して出会ったことを思い出します。本では、こうした力を「知育」に対して「徳育」という言葉で表し、知育に熱心なのに徳育を忘れていた教育熱心なお母さんがいるという話や「徳育はどこからだってはじめられます。…(これを身につければ)重度の子が軽度の子に負けないことが痛快です。障がい者が我々に十分勝ち得るところが醍醐味です」との言葉とともにその実践が紹介されていました。そして最近の研究では、この非認知能力は、安心感や好き嫌いなどの感覚を司る大脳辺縁系・脳幹部と関連性があり、これが成長することで知識や判断を司る前頭連合野に繋がりが、この逆はないということもわかってきました。つまり、知識をいくら高めても非認知能力は高まらない、逆に、非認知能力を高めていくことを意味しています。さて、冒頭で紹介したスタッフの彼は、今年の仕事の目標を次のように書いています。行動目標「子どもたちを楽しませたい」具体的にする「子どもたちが遊べるように遊び道具を作る」「子どもたちとしっかりかかわる。話をすること」「子どもたちの気持ちを聞く」彼の変化は私生活でも明確です。自分の給与で家族との旅行を楽しんだり、ファンクラブに入って推しのジャニーズを堪能したり…。そして最近、グループホームでの一人暮らしも始めました。こうした彼の成長(と言っては失礼かもしれませんが)は、彼の知識・学力よりも彼の人柄や姿勢(つまり非認知能力)によって成されたことを感じます。昨今の、優秀な学歴、知識をお持ちの偉い(と言われる)立場にあって私利私欲に

走られる大人の方々と比べると、彼は、確かに十分に「勝ち得た」生き方をしています。「経済格差」とよく言われますが、今にあってはそれ以上に「心の格差」「心の貧困」について考える時だと思えます。鬼滅の刃で杏寿郎の母は「なぜ自分が人よりも強く生まれたのかわかりますか。弱き人を助けるためです。弱き人を助けることは強く生まれたものの責務です。生まれついて人よりも多くの才に恵まれた者は、その力を世のため人のために使わねばなりません。天から賜りし力で、人を傷つけること、私腹を肥やすことは許されません。」と語り掛けます。人々がこの物語に感動するのは、人間としての豊かさ、心根を備えた生き方に、改めてはっとさせられ、そうありたいと願う自身の心が沸々と湧き上がるからではないでしょうか。鬼は現実を写した姿なのかもしれません。そんなことを考えていたら、先日新聞に「すべてのわざには時がある」という政治学者、姜尚中さんの言葉が紹介されていました。「すべてのわざには時がある」というのは旧約聖書の言葉だそうです。だとすれば、今このときに私たちが行うわざとはなんだろうとふと考えます。姜さんは、その中で、野菜作りを楽しむようになった以前と変わった自分自身を振り返りつつ「暮らしの『小さきもの』に感動できる環境がいかに大切か。丸くなったという人もいるかもしれませんが、僕は逆に自分の可能性が広がった気がして」と述べられています。ご紹介した彼のあじさいの話のように、身近に幸せを感じる、身近な成長を感じる、季節の移り変わりに心を寄せること…、身近な幸せを知るものこそが、それを大切にすることこそが、豊かな社会を築いていくのだと改めて感じる日々です。

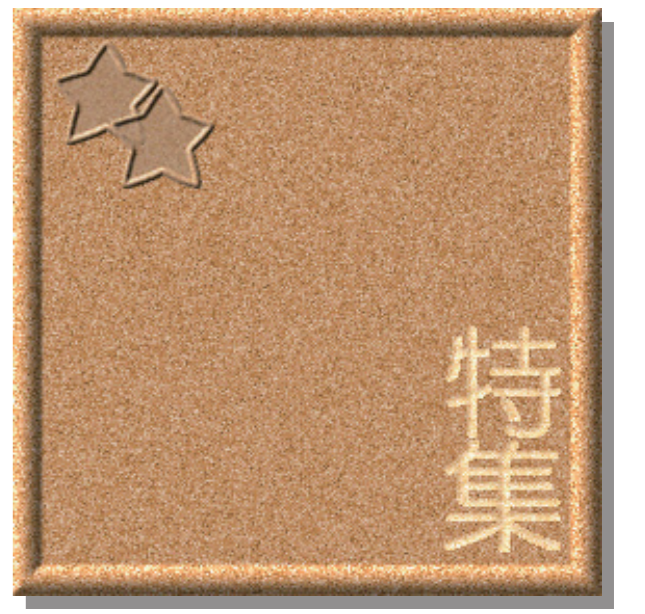
Message...



勝ち得る生き方

「きれいな紫色のあじさいが咲いていたんだよ」と彼は教えてくれました。その彼は、5年生の時、「ゲームをやめることができず、ゲームの世界と現実の生活を混同していることもあります…」とおっしゃるお母さんの言葉とともにひゅーるぼんにやってきました。やってくるなり、すぐにテレビゲームを見つけスイッチを入れようとしたので、「ここでは、子どもたちがみんなゲームをするルールを決めて使っているから今は使えないよ」と僕が言った途端、「悪魔だ!」との一言。そして同時に、僕の顔面に強烈なフックが入っていました。この時のことは彼もよく覚えていて、時々意地悪で僕がその話をすると「もうそれは言わないで」と恥ずかしそうな顔をして彼は私に訴えます。その5年生の時の出会いから、16年。彼は、特別支援学校高等部を卒業すると同時にスタッフになることを志望し、現在、私たちの仲間のひとりとして働いています。就職したばかりの頃、ある保育士のスタッフから、「季節ごとの壁画を作って」と頼まれて以来、毎月の壁画作りは彼の大切な仕事の一つとなっています。その下絵にあじさいがあったので、それを伝えたところ、冒頭の言葉が返ってきたのです。そして「夏の前の梅雨が来たんだよ」「あじさい、て

るる坊主は子どもたちが喜ぶから」とも話してくれました。何気ない会話ですが、5年生の時の彼を知っている私にとっては感慨深い一言でした。彼は、家のそばで、紫色のあじさいの花を見つけ、おそらく美しいと感じたのだと思います。そして、そのあじさいを壁画のモチーフにしようと考え、さらに、それを指摘した僕に、梅雨がきたことを共有しようとしたのです。「あじさい」の絵カードを見せてこれは何ですかと聞き「あじさい」と本人が答えたというレベルとは明らかに違います。事物の名前が適切に言えること、これは語彙力という知識の力です。一方で、彼があじさいに目を向け美しさを感じ…という部分は、知識の積み重ねだけでは形成されない感情が伴った言動です。そこには、創造力や協調性、人を喜ばせたいという気持ち、感情を共有したいという気持ちなどが含まれています。以前も書きましたが、これが非認知能力という心や社会性にかかわる力で、昨今、幼児教育、学校教育においてもこの力が重視されています。この力を身につけるには幼児期がとて大切といわれていますが、私は、生涯



障がいのある人たちの豊かな生き方

ぼんぽんの活動の中で思うこと、そして願い

指導員・社会福祉士

福島 あゆみ



休み明け、ぼんぽんに通所されて

いる方と「昨日なにをしたん？」という会話になることがあります。「テレビみたよ」「ゲームセンター行った」「(家族と)買い物に行ったよ」などいつも同じ答えが返ってきます。コロナ禍になり、より一層、休日の過ごし方が固定化されてきていることを感じます。今回は、障がいのある人の余暇活動を通して、その豊かな生き方とはどういうことなのか、考えてみたいと思います。

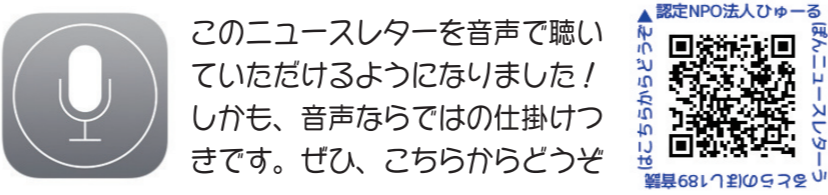
余暇の活動について、ぼんぽんに通う本人と家族へアンケートを取った結果があります。「本人が主体となつて行う趣味がありますか？」の問いに対して、8人中5人が「はい」と答えました。内容としては、ゲームやテレビ、YouTube、音楽を聞く、散歩、買い物に行くなど、どちらかというと家で過ごす内容が多い印象でした。

また「休みの日などに定期的に通う場所や活動はありますか？」の問いには、「今はコロナウイルスの影響で参加できないようですが」サークル活動に参加する人が4人いらっしゃり、そのほとんどが家族と参加されるとのことでした。つまりアン



ケートを通して分かったことは、余暇活動が限定的、固定的であり、外出する場合は、付き添いも含めその相手がほとんど家族であることが多いということでした。その一方で家族の高齢化に伴い、外出に付き添うことの難しさを訴えられる家族もいらつしました。

平成23年度の「障害者の社会参加活動の支援に関する調査」でも次のような結果が示されています。余暇の過ごし方として、家の中では「テレビをみている」と答えた人が66%、外での過ごし方は「買い物」と答えた人が55%。そして余暇を誰と過ごしているかという質問には、母親が55%、父親が48%で、家族と過ごしている人が多いという印象を受けます。この調査結果と、今回のアンケート結果を比べてみると、約10年という時を経て、外出を支援する福祉サービス



このニュースレターを音声で聴いていただけるようになりました！しかも、音声ならではの仕掛けつきです。ぜひ、こちらからどうぞ

自立」が重視される傾向があり、どちらかというとな本人のやりたいことよりも、とりあえず就業することが優先されるという傾向は変わりません。学校においても技術訓練、就業訓練は大切ですが、意欲や興味関心に着目した学びや成長の機会をより大切だと思われています。そうしたことから、「まなびキャンパスひろしま」など障がいのある人の青年期の学びをサポートする動きが広がっており、今後もさらに多様性を増していく勢いを感じます。

そしてアンケートなどからもみて取れるように、障がいのある人と家族の関係はとても密接です。成人してから余暇の時間を家族と過ごすことが多く、本人の行動が家族の都合に左右されることも少なくないように感じます。社会の諸事情で難しさはあるとは思いますが、私は、成長に伴い家族という一番身近な集団から人間関係を広げていくことも大切なことだと考えています。その出会いの中でさまざまな人と気持ちを通わせ、楽しいことや嬉しいことを共有し共感する経験を通して多様な価値観や生き方に触れることができます。それは興味関心の幅を広げ、好きなことを見つめるチャンスを増やすことにもつながるのではないかと考え

ています。さらにここでもうひとつ大切にしたいことがあります。それは、「本の思いはどうか」ということです。先ほど挙げた調査結果にこのような内容がありました。「余暇をあなたはどう過ごしたいですか？」という問いに対し49%の方が「自由気ままに自分で過ごしたい」と答えています。一方、その家族の35%の方は「スポーツをして欲しい、趣味、サークル活動などで仲間作りをして欲しい」と答えていらつしています。もちろん家族の願いも本人の可能性を広げていくきっかけになるはずなので、家族で余暇について話しあったり考えたりすることは、幼少期からとても大切だと思います。時には、家族がより積極的に提案したり、その環境を作られることもあるかもしれません。そういうときはぜひ、本人の思いをしっかり耳を傾け、本人の選択を尊重し、後押しをしてあげて欲しいと思います。

「豊かに生きていく」ためには、生涯を通して多様な生活経験と情報学習の機会が提供されること、そしてそこに多様な出会いがあることがとても大切だと思います。その積み重ねは、自分らしく生きていく可能性を広げることに繋がるはずなんです。私たちは、彼らと共に様々なことを体験し、喜び、時には一緒に悩みながら、それぞれの「豊かに生きる」を応援していきたいと思っています。

生活経験の幅、生涯学習の機会、情報収集をしていく経験や能力の差、ライフステージの変化の少なさ、工賃の少なさなど様々な要因が考えられます。とりわけ現在は、障がいの

感する経験を通して多様な価値観や生き方に触れることができます。それは興味関心の幅を広げ、好きなことを見つめるチャンスを増やすことにもつながるのではないかと考え

ています。さらにここでもうひとつ大切にしたいことがあります。それは、「本の思いはどうか」ということです。先ほど挙げた調査結果にこのような内容がありました。「余暇をあなたはどう過ごしたいですか？」という問いに対し49%の方が「自由気ままに自分で過ごしたい」と答えています。一方、その家族の35%の方は「スポーツをして欲しい、趣味、サークル活動などで仲間作りをして欲しい」と答えていらつしています。もちろん家族の願いも本人の可能性を広げていくきっかけになるはずなので、家族で余暇について話しあったり考えたりすることは、幼少期からとても大切だと思います。時には、家族がより積極的に提案したり、その環境を作られることもあるかもしれません。そういうときはぜひ、本人の思いをしっかり耳を傾け、本人の選択を尊重し、後押しをしてあげて欲しいと思います。

●ぼんぽんアートカタログ & オリジナルTシャツ販売します

年2回、ぼんぽんから出しているアートカタログ。今回は夏バージョンです。ぼんぽんアートグッズやオリジナルデザインのTシャツなど、盛りだくさんの内容です。申し込み締切りは7月4日(日)です。詳しい情報については、ぼんぽんInstagramに随時掲載しますのでぜひご覧ください。



●「コロナ禍で見つけたわたしの楽しみ」大募集

コロナウイルスの影響で、外出や人との接触を避けた生活が続いていますね。そんな中、みなさんから、自粛生活をポジティブに捉え、生活をちょっと楽しくするヒントを大募集します。「うちではこんなことして楽しんでいるよ!」という皆さんの楽しみを教えてください♪ QRコードから、ひゅーるぼんの掲示板にアクセスできます。ご覧になるだけでももちろん構いません♪皆さんの投稿もどしどしお待ちしております。



●HullFanへのご協力・ご寄付(1月～5月) ありがとうございます

(正会員・賛助会員) 原田憲、門田知之、阿曾沼武、松田智仁、塩田芳丈、柴田奈苗、梅田雅司、池田輝次、望月美和、三村誠司、渡部英明、生田英雄、吉本尚規、加藤直規、林充、藤岡明美、松島夏子、古川のぞみ、古屋みち子、宮本優作、久保木晴一、金子新吾、迫谷克利、匿名希望8名(一般寄付) 今福三津枝、阿曾沼武、渡部英明、梅田雅司、池田輝次、吉本尚規、加藤直

●子育てサロン



毎月第2・第4火曜日の10:30～開催しています。コロナウイルスの感染

状況によってはインターネット配信(ZOOM)で行うこともあります。親子でできる遊びやストレッチ、絵本など楽しさいっぱい。ぜひ、ひゅーるぼんまでお気軽にお問い合わせください。(要事前予約 ☎082-831-6888 川口、小林)



賛助会員 Hull Fan 年間4,000円
お申し込みは www.hullpong.jp から

私たちの活動は
あなたのあこころがしで
もっとあつたかく
やさしくふくらみます
ぜひ私たちを支えてください

このご寄付は税制上の優遇を受けることができます

規、三宅栄一郎、林充、藤岡明美、平木憲昭、鎌田春生、松田健、長野芳子、北束志朗、カフェぶどうの木、広島信用金庫、株式会社NTTドコモ中国支社、総合エナジー株式会社、株式会社広島銀行古市支店、株式会社アイランドオート・みんなの板金屋さん、株式会社インシストコーポレーション、積水ハウス株式会社広島シャーマン支店、司法書士法人高尾事務所、株式会社中電工、株式会社BOAZ、NPO法人ANT-Hiroshima、ハウコクホールディングス株式会社、バクケンモーツアルト、職員1名、匿名希望1名(物品寄付) 小野塚剛(かみしばい絵本)、阿曾沼武(おいしいはっさく)、増見集平(きれいなお花)、竹内章子(きれいなお花)(敬称略・順不同)

みなさんお気づきだと思いますが、今月号より紙面が2倍の大きさになりました。創刊時がB4サイズ、そして2001年にA3サイズとなり、今回A2サイズ。これも時代に配慮してといえそうですが、物事には全て先駆者がいらつしています。それは、顧問もお願いしているひゅーるの寺尾文尚先生です。かねがね「ひゅーるの広報誌は字が小さい」とおっしゃっていた先生から、昨年ひゅーるの広報誌が届けられました。そして、その広報誌がなんとこのびっくりするほど大きくなったのです。いつになっても先生からは教えられないばかりです。もしかするとこの大きさがこれからのスタンダードになるとしたらAとかBではなく、心を込めて「寺尾サイズ」と呼ばたいものだと思います。T.K

think different for happiness. この子らと世に光を
発行者: 認定NPO法人ひゅーるぼん 広報委員会
発行日: 2021/06/20 (年2回発行)
ひゅーるぼん会報 "つるつるのほし"